

令和6年度第1回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカ・ワーキンググループ
及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について(報告)

1. 開催日時

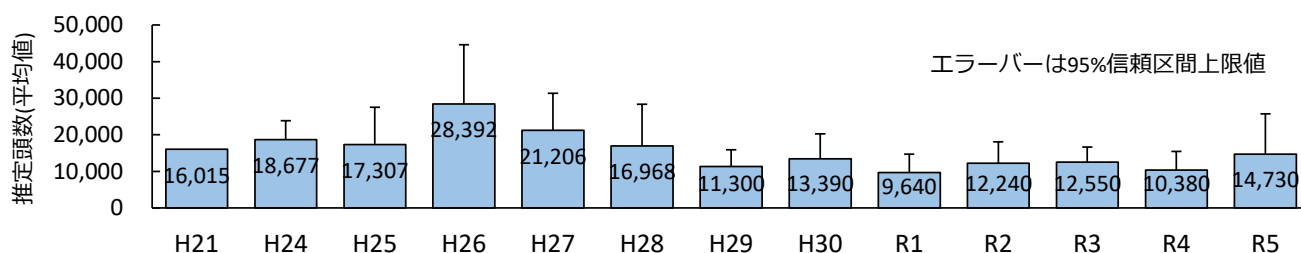
令和6年7月25日(木) 14:00～17:00 屋久島環境文化村センター 1階(レクチャールーム)

2. 議題と議事概要

(1) ヤクシカの生息状況等について

■報告の要点

- 糞粒調査の結果、R5年度は前年度と比較して増加した地点は25地点に対し、減少は12地点。地域的には北東部と南西部、南部の一部で減少し、その他地域では増加。(鹿児島県)



- 花之江河のヤクシカ撮影数は減少したが、小花之江河でやや増加し両湿原の撮影数は同程度となった。一方、糞塊数については花之江河で増加し小花之江河では昨年度と同様少ないまま。(林野庁)

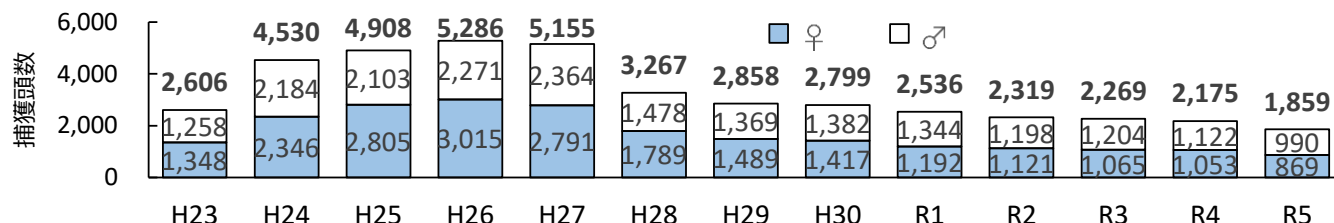
■主な意見

- ヤクシカの生息状況については、はっきり増加に転じたと考えられる。
- 過年度の調査結果も踏まえると現時点では、いったん減ってまた増えてきたという認識。
- 糞粒法なので調査地点数に限りがあり、ぶれはある。現場感覚では、増加している実感はない。

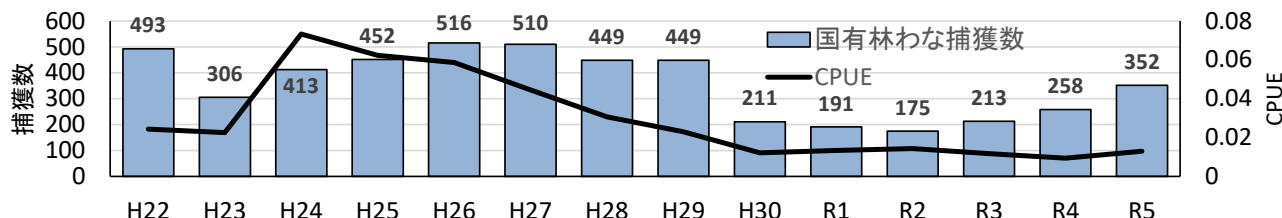
(2) 捕獲等の被害防止対策について

■報告の要点

- ヤクシカの農作物被害金額は昨年度よりやや増加。猟友会員数は昨年度とほぼ変わらないが、若干60代未満が増加し60代以上が減少(屋久島町・鹿児島県)
- R5年度のヤクシカ捕獲頭数は1,859頭で前年度の85%。国有林・民有林での林業被害はなし。(林野庁・鹿児島県)



- 令和5年度指定管理鳥獣捕獲等事業は、湯泊で実施し、目標頭数40頭に対し21頭捕獲(52.5%)。(鹿児島県)
- 令和6年度のSS体制による計画捕獲はカンカケ林道で待ち伏せ型誘引狙撃の実施を予定。(環境省)
- 令和5年度の国有林のわな捕獲数とCPUEを河川界区分別に見ると捕獲数は河川界9でCPUEは河川界6で最大。月別では捕獲数が1月、CPUEが4・5月、経年では捕獲数が平成26・27年、CPUEが平成24年で各々最大。(林野庁)



■主な意見

- 指定管理鳥獣捕獲等事業で今後、栄養状態や繁殖状態について調べることも可能であれば少し検討いただきたい。
- 指定管理鳥獣捕獲等捕獲について、成獣でなく幼獣がずっと捕獲されるのならば個体数は減らない。
- くくり罠は捕獲個体を選べないのが課題だが、多少の荷重調整はできるので、幼獣では罠が作動しないように指導されるとよい。
- 10月以降に捕獲すると、離乳直後の幼獣がかかりやすくなる。捕獲を春先からできるとよい。
- かかったシカを見るとまわりのシカが警戒するため、罠の毎日の見回りが重要。

- ・捕獲目標の 4,500 頭は、実際の捕獲数とかけ離れ、体制や方法を抜本的に変える等、取組改善が必要。
- ・国の半減目標については、基本的に R5 年度に達成できなかったのを 5 年間延長する考え方のため、まず R10 年度までに 9,000 頭の個体数を目指すとよい。高過ぎる目標設定より柔軟な対応が望ましい。
- ・管理ユニットを 10 に分けるのは細かすぎる。遺伝的には 2 区分であり、管理上も 10 区分は多く、10 区分にするならもう少し調査ポイントが必要。管理ユニットを見直す時期にきている。
- ・管理区分を大きく分けて、管理区分ごとに目標を決めるべき。西部を含めて全島的に目標設定するのは現実的ではない。過去に 3 分割案を提案した経緯があり、現状を見るとその考え方に戻る必要がある。

(3) 森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等について

■報告の要点

- ・R6 年度の植生の保護・再生手法の検討調査は、カンカケ 600m、カンノン、愛子岳 600m、愛子岳 800m、中間 1、尾之間試験地の植生保護柵と半山と川原の萌芽枝保護柵で実施予定。(林野庁)
- ・R6 年度の森林生態系管理目標の現状把握・評価については、上記植生保護柵と西部地域の植生垂直分布調査箇所、及び環境省の固有植物種等の調査箇所を実施予定。(林野庁)

■主な意見

- ・植生の回復傾向がこれまで見えてきたが、今回の増加を受けてどう変化するか注目したい。

(4) 特定エリアの対策(西部地域)について

■報告の要点

- ・R5 年度は瀬切で囲い罠 2 基による計画捕獲を実施。潜り込み式ゲートを使用し 11~2 月の合計 6 週間で 11 頭（オス 7、メス 4）を捕獲。ゲートの高さ設定と止めさし時に暴れて周囲のシカを警戒させるのが課題。(環境省)
- ・R6 年度の計画捕獲は瀬切大橋西側において囲い罠 4 基で実施し止めさしには空気銃も活用予定。(環境省)
- ・自動撮影調査では、例年、半山や川原、誘引捕獲を行っている瀬切で撮影頻度が高く、R5 年度も半山や瀬切で高かったが、川原では低い傾向。性齢についてはメス成獣の割合が最も高く、秋から冬はオス成獣が増加。(環境省)

■主な意見

- ・空気銃の活用は、場を荒らさない、個体に苦痛を与えない、止めさしが安全等の利点がある。
- ・西部の目標捕獲頭数が 116 頭と実績に比べ高いが、誤差のある糞粒調査結果だけでなく、カメラ調査結果も活用して設定されるとよい。
- ・誘引餌について、米ぬかは一回雨が降ると発酵して食べなくなる。
- ・計画捕獲の目的は①効率的な捕獲方法の検討と②植生を回復させる密度水準の検討のため。捕獲が思うほどできていないため、どちらを優先するか考えるとよい。

→まずは改善点を示して囲い罠でのやり方で今年度どこまで捕獲数を上げられるかやっていきたい。(環境省)

- ・対象区、隣接区、個体数管理区ごとの撮影頻度の違いを示してほしい。
- ・台風後は誘引効果が落ちるので柔軟にスケジュールを変えられるとよい。
- ・夜間銃猟についてもロードマップを作れるのではないかな。

(5) 屋久島世界遺産地域モニタリング計画の改訂について

■報告の要点

- ・昨年度の WG 委員の意見を踏まえて修正したモニタリング計画改訂（案）を提示。(環境省)
- ・全体として、「状態目標」を「目指すべき具体的な状態」に名称変更して内容を拡充したほか、モニタリング目的を追加。ヤクシカについては捕獲努力量や農作物被害及び利活用状況の項目を追加。(環境省)

■主な意見

- ・錯誤捕獲は、どう対処（放獣等）したか等もあり、錯誤捕獲件数を報告すればよいという話ではない。(鈴木委員)
- ・ブラウン・ブランケ法の課題は統計的に扱いづらいという書き方がよい。(矢原委員長)

(6) その他

■主な意見

- ・全島的な個体数コントロールが難しければ、管理区分ごとに考える等、方針転換すべき。
- ・罠猟の場合、基本的に自分の猟場が決まっているのが一般的。捕獲についてはまだ工夫の余地がある。
- ・猟友会の新規会員は定年後の人が多く、若者の新規参入は少ない。
- ・くくり罠では小ジカがかかりやすく、母親は学習しているようである。
- ・有害捕獲の場所や、やり方についてどうコントロールするのが課題。
- ・猟友会に頼るやり方は限界が来ている。また、報酬を高くすれば解決するわけでもなく、技術が重要。
- ・抜本的に見直す時期。捕獲圧をこれ以上高める余地がなければ、優先順位を決める必要がある。